日中友好の架け橋に

尾張 智華子

「桜梅桃李～わたしと日中の明日を創る～」。このスローガンのもと、私たち37団は日本・中国青年親善交流事業に参加した。このスローガンには、「日中両国、また参加青年同士の個性を尊重し、お互いに共感できる友愛の関係を構築する、そして本事業を通じて参加青年一人一人が新たな一歩を踏み出し、両国のより明るい未来を創造する」という意味が込められており、参加青年一人一人が桜梅桃李のようにそれぞれの個性を発揮し、両国の“わたし（渡し）”となれるようそれぞれが努力を重ねてきた。そして団としても個人としても本事業を大成功で終えることができたと感じている。本レポートでは訪中プログラムで印象に残った体験と成果、自身の今後の展望について述べていく。

印象に残った体験として、以下の四つが挙げられる。まず在中国日本国大使館への表敬訪問である。山本恭司公使は日本と中国の関係について質問形式で話をしてくださった。事前に勉強はしていたが、それでもなお知らないことが数多くあり、知識が足りないことを痛感した。また中国のことに限らず、日本に関しても分からないことが多くあると感じ、自国に関してしっかり勉強したいと思った訪問であった。また山本公使は「中国人という集合名詞を固有名詞に変えて、一人一人を見てほしい」と語ってくださった。私たち日本人がメディアを通して見る中国人の姿と実際の中国人の姿が異なるためである。本事業の初めの頃にもメディアと現実の違いは感じたが、事業を終えた今、その意味をより深く感じるようになった。「集合名詞から固有名詞へ」というのは本事業に限らず、どこの国へ行っても、日本国内においても、人と関わる上では大切なことであると思った。

次に太原でのホームステイである。まず東湖酢園で黒酢の成分や作り方に関する展示を見た後、製造過程を見学した。全て人の手で作られており、おいしいものを作るためには苦労を惜しまないところは日本と同じだと感じた。黒酢工場見学の後は、レストランで夕食をとった。ホストファミリーが数人の友人を呼んでくれ、多くの人と交流することができた。また、レストランでは、厨房の見学と料理体験をすることができた。揚げ饅頭の他、山西省の有名な麺料理の一つ、一根面作りも体験することができた。家に帰った後は、なつめとお茶を御馳走していただいた。私たちの健康を気遣ってくれ、ゆっくりできるように様々声を掛けてもらった。また共に剣玉で遊び、有意義な時間を過ごすことができた。健康面の他に、言語面に関してもサポートをしてもらった。私は参加青年の1名と共にホームステイをしたが、二人とも中国語を話すことができなかった。そのため日本語を学ぶ学生を連れてきてくれ、通訳を通して円滑に会話をすることができた。また私が「中国に留学したい」と言うと、「ぜひ山西大学に来てほしい」と言ってくれた。夜には「あなたたちは私の妹で、私たちは姉と妹の関係」と言ってくれた。短い時間しか共に過ごしていないにもかかわらず、どこまでも私たちのことを考えてくれ、もてなし、受け入れてもらった。今回のホームステイは、中国語を話すことができないことなど様々な面で不安があったが、ホストファミリーとその周りの方たちの優しさに触れ、このような不安はすぐに消えた。中国の方の温かさを実感するホームステイとなった。

ホストファミリーとともに

そして浙江工業大学の学生との交流も強く印象に残った。参加青年と学生がペアになって文化交流を行った。中国の伝統的な歌や太極拳はとても魅力的であった。北京の中国国際青年交流センターにおいても中国の料理や書道の文化を見たが、学生たちが演じてくれたものに

は、迫力を感じた。プロにはない学生ならではの魅力というものを感じた。私たち中国派遣団は童謡「ふるさと」の合唱やソーラン節等を披露した。直前まで不安でいっぱいであったが、最高のパフォーマンスを披露することができたと感じる。浙江工業大学の学生にも、私たちの迫力を感じてもらえたのではないだろうか。僅かな時間ではあったが、日中友好の種をまくことができたと感じることができた大学交流であった。

浙江工業大学で披露したソーラン節

最後に、各地で行動を共にした現地の学生との交流である。中国語で自己紹介をすると喜んでくれ、そこから会話を広げることができた。相手の言語を話すことができなくても友好関係は築けるが、話せた方がより強く深い関係を築くことができるのかもしれないと感じ、少しずつ中国語を覚え、事業の後半には自分の言葉で相手に気持ちを伝えることができるようになった。特にホームステイでは、自分の口で伝えた際と通訳を通して伝えた際のホストの反応が少し異なっていたため、少ない語彙力でも中国語でコミュニケーションをはかることができ、良かったと感じる。そして相手を理解し、受け入れること、また受け入れようとする姿勢が、コミュニケーションをはかる上では重要であるということを、直接的ではないが、この経験から学ぶことができた。

本事業で様々な人と触れ合い、様々な場面で大きな触発を受けた。また自身も成長することができ、目標に定めたことをある程度達成できたと感じる。特に以下の二つに関しては大きな成果を修めることができた。

一つ目に「日中友好の架け橋をつなぐきっかけづくり」という部分である。これを達成できた理由として、先述したようにホストと姉妹関係を築けたことが挙げられる。また北京で行われた中華全国青年連合会主催歓迎会の際、外交部の方は「私に日本人の良い印象を与えてくれてありがとう」とおっしゃってくださった。その方にとって今回のレセプションが日本人と交流する初めての機会であると言っていた。拙ない英語と通訳を通しての会話であったが「この交流を有意義なものにしたい」という気持ちから一生懸命に会話をした。相手の言語を話すことができなくても、私たちの態度や行動次第で友好関係を築くことができるのだと強く感じた瞬間であった。

また自身のキャリアや学生生活につながる体験にすることができた。国を越えた人と人との交流の大切さを学び、「○○人」ではなく「○○さん」という視点から相手を見ることができるようになった。そしてこの「人と人との交流」に大きな魅力を感じ、将来の方向性を定めるきっかけとして考えられるようになった。さらに本事業を経て、中国への留学を決意した。本事業に参加するまでは中国に留学しようとは考えたこともなく、また留学に対しても漠然と「英語圏に留学したい」と考える程度であった。しかし本事業で中国の姿を見ていくうちに都市によって雰囲気が異なり、現在飛躍的に発展している中国という国に対して興味・関心が高まり、留学先を中国に変更した。また留学に行く目的も見え、事業参加前とは大きく異なる決断をした。このように自身の進路と学生生活に事業での経験を大きく反映させることができた。

本事業で得たものと修めた成果をいかすため、今後は以下のことを行っていきたいと考えている。まず日中に関するイベント等に積極的に参加し、知識を増やしていきたい。そして得た知識を日中両国の青年たちに伝えていきたいと考えている。本事業を通して日本と中国に対する関心が高まり、歴史・文化についてより深く学んでいきたいと感じた。また今回の訪中では中国について多くのことを教えてもらったため、今度は日本のことを中国の人々に伝えていき、日中友好への次の一歩を刻んでいきたいと考えている。日中の青年たちに両国の魅力を伝えていきたい。

次に本事業で学んだことをより多くの人に向けて発信しようと考えている。実際に中国を訪問し、自分が訪中前に想像していた中国と実際の中国の姿が異なり、アメリカを訪れた際には感じなかった中国独特の魅力を強く感じることができた。街並みやその街を歩く人々の姿も違い、また日本と似ていると感じる部分も多くあり、本当の中国の姿を発信することでより多くの人に中国に対する興味を持ってもらうことができ、異文化理解を促すことができるのではないかと考える。また私の周囲の人の話を聞いていると、「中国人」とひとまとめにして考える人が多いように感じる。以前は私もそうであったが、集合名詞を固有名詞に変換することの重要性、また